

一坪反戦地主会顧問・仲宗根政善

著者	新崎 盛暉
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	22
ページ	66-71
発行年	1996-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/1119

一坪反戦地主会顧問。仲宗根政善

新崎盛暉

いま、わたしの手元に、もうすっかり色あせてしまった粗末な製本の『沖縄の悲劇―姫百合の塔をめぐる人々の手記―』（華頂書房）がある。奥付を見ると、昭和二十六年七月十五日初版印刷、昭和二十七年一月三十日訂正四版発行、定価二百二十円、地方売価二百三十円とある。わたしが、本屋の棚からこの本を手にとったのは、一九五二（昭和二七）年秋、都立高校一年のときであった。この本は、国民学校三年で敗戦を迎え、それまで鬼畜米英と教えていた教師たちがアメリカ民主主義礼讃へといとも簡単に転換することへの反発から、軍国少年としての尻尾を残したまま戦後民主主義の時代を生きてきたわたしを、平和主義者へと転換させる契機の一つとなったのだが、そのことについては、『昭和同時代史を生きる―それぞれの戦後』（内山秀夫・栗原彬編、有斐閣選書、一九八六年）という本の中で書いているので、これ以上は言及しない。

また、わたしは、一九七七年、当時『新沖縄文学』に連載していた「沖縄現代史への証言」というシリーズのために、仲宗根先生のお宅で、かなり長いインタビューを行ったことがある。その記録は、

新沖縄文学の四三号と四四号に連載され、その後『沖縄現代史への証言』（新崎編、沖縄タイムス社、一九八二年）という本にも収録されているのだが、活字化されたものよりも、元の話の方がはるかに興味深かったという印象がある。つまり、仲宗根先生の気配りから、削除されたり、婉曲表現に改められた部分が少なからずあるということなのだが、十五年以上も経ってしまうと、その具体的部分については、正確にはほとんど記憶していない。

さて、そんなわけで、ここでは、一坪反戦地主会顧問・仲宗根政善についてだけ書いておきたい。

仲宗根先生が、一フィート運動の会の代表であり、ひめゆり平和祈念資料館の館長であったことはよく知られている。だが、一坪反戦地主であったこと、まして、一坪反戦地主会の顧問であったことについては、まったくといっていいほど知られていない。一九九五年七月二十三日に開かれた、ひめゆり同窓会、沖縄言語センター、沖縄タイムス社主催、沖縄県、一フィート運動の会、一坪反戦地主会、琉球放送、NHK沖縄放送局後援による、「戦後50年目に仲宗根政善から何を学ぶか―仲宗根先生をしのぶ集い」のパンフレットの年譜にも、そのことは記載されていない。それは多分、沖縄戦の体験を未来へ引き継ごうとする平和的活動としてひろく沖縄社会に認知されているひめゆり平和祈念資料館や一フィート運動が、「『社会ざらい』を自認」（沖縄タイムス、一九九一年九月六日）する仲宗根政善のイメージとよく調和するのに対し、国の米軍用地強制使用政策に正面切って対峙する猛々しい（？）一坪反戦地主の運動は、「温厚な研究者として政治と最も遠いところに位置し続けて

きた」(前掲、沖縄タイムス) 仲宗根政善のイメージと、あまりにもかけ離れているからであろう。

だが、仲宗根先生の日記や古い記録を丹念に調べながら、沖縄タイムス紙上に『相思樹に吹く風、仲宗根政善とその時代』を長期連載した長元朝浩氏は、すでに九一年の段階で、次のような仲宗根先生の、那覇防衛施設局長弘法堂忠宛の手紙を紹介している。

「拝復、御通知受領致しました。沖縄基地は、沖縄が土地狭小の上、全国の四四パーセントを占めていると伝えられています。極めて不合理であり、県民はその縮小を要望していると思います。県民の要望に答えて基地の縮小こそはかるべきであります。われわれ沖縄戦を体験した者には、沖縄基地が県民の生命財産を守るとは考えられません」(前掲、沖縄タイムス)

仲宗根先生はなぜ一坪反戦地主になったのか。それは、わたしたちが、一坪反戦運動を始めた年、すなわち一九八二年に刊行された角川文庫版の『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』の「まえがき」や「あとがき」を一読しただけでも明らかである。沖縄タイムスの「思潮95」(七月二十八日)でも引用したことがあるが、その「あとがき」に次のような文章がある。

「沖縄県民の多くは非核三原則が厳守されているとは思っていない。核の脅威におびえている。沖縄基地に駐留する米第三海兵師団は、インド洋・ペルシャ湾での有事に即応する緊急展開部隊として出撃態勢をとっていて、演習は激化しつつある。

二十余万の生霊の静かに眠る土の上に、このような巨大な基地をそのままにしてよいのだろうか。」

これは、まぎれもなく、一坪反戦地主のことばである。このことばのすぐ後に、「沖縄戦を忘れてはならない。戦争体験を風化させてはならない」という絶叫にも似た文章が続く。

わたしの記憶に間違いがなければ、わたしたちが一坪共有運動を始めたころ、あるパーティーの席で、(多分、誰かの出版祝賀会か何かだっただろう)、元沖縄タイムス社社長の豊平良顕さんが、「あなたたちは非常にいい運動を始めてくれた」と声を掛けてきた。その場に仲宗根先生も同席されていて、豊平さんの発言に賛同して、大きくうなずかれ、こうしてお二人は一坪反戦地主になった。名嘉順一(琉大教授)さんによれば、軍用地購入や登記に必要な書類の準備は、名嘉さんたちと一緒にしたらしい。豊平さんや仲宗根さんだけでなく、仲松弥秀さんとか牧港篤三さんとか、この世代の多くの人たちが、積極的に一坪反戦地主運動に参加してきてくれたことは、わたしたちを驚かせもし、勇気づけもした。牧港篤三さんなども、仲宗根先生とは別の意味で、「政治から最も遠い位置にいる人」というイメージがあったからである。

仲宗根先生が、一坪反戦地主会の顧問になられたのは、わたしがお願いしたのか、それとも、一緒に顧問になられた玉野井芳郎さんがお誘いになったのか、はっきりしない。多分後者のような気がする。しかし、二年毎の役員改選にあたって、一坪反戦地主会事務局長の城間勝君に命じられて、わたしが何回か意思確認の電話をさしあげたときなど、「何もできませんが、皆さんの運動に役立つのであれば…」と控え目ながら快諾されたことは間違いない。

仲宗根先生が気配りの人だからといって、玉野井さんやわたしとの付き合いや義理で一坪反戦地主会の顧問になったわけではない。それは、先の引用文を読んだだけでも明らかである。

わたしはこれまで、何回となく、過去の沖縄戦を語る者と、現在の反戦・反基地を闘う者との断絶について指摘してきた。だが、仲宗根先生は、「昔から平和であった沖縄のこの美しい空を、この青い海の上を、戦闘機の一機も飛ばせたくない。戦争につながる一切のものを拒否する」（ひめゆりの塔をめぐる人々の手記）「まえがき」という決意のもとに、ごく自然に一フイート運動の会の代表となり、一坪反戦地主会の顧問にもなっていた。

「基地がなくなればいいというのは簡単だが、沖縄経済への影響を考えると単になくせばいいということにもならない」といった大田知事の発言（沖縄タイムス、九五年七月三十日）などに接すると、その落差の大きさを痛感する。それは、「研究や評論と行政は違う」（前掲、沖縄タイムス）といつてすまされることではない。

この『沖縄文化研究』特集号は、仲宗根先生一周忌前には刊行される予定という。ちょうどそのころには、一九九七年以降の米軍用地強制使用のための公開審理が開かれているだろう。一人でも多くの読者が、経済的差別や共同体社会の圧力に耐えて、「戦争につながる一切のものを拒否する」反戦地主の「志」に想いを馳せてくれれば、と思う。

〔追記〕

八月初旬、先の文章を沖縄文化研究所に送付し、それがゲラになって戻ってきた十一月

上旬までの間に、沖縄の状況は一変していた。小学生の少女が三人の米兵に襲われるという忌まわしい事件をきっかけに、戦後五十年の沖縄の矛盾は一挙に爆発した。それは大田知事の代理署名（署名代行）拒否という行動を生み、これを支持する圧倒的な県民世論は、日米安保体制の土台を揺るがすまでになった。文字通り「島ぐるみ闘争」の再現である。

四十年前の「島ぐるみ闘争」のときは、どうだったのだろうか。ここまで考えたとき、「島ぐるみ闘争」の曲がり角で起きた第二次琉大事件の処分学生を本土の大学に編入学させるために奔走していたころの思い出を語る仲宗根先生のことばが想い浮かんできた。

「京都の立命館と同志社にいった日は、雪の降る日でした。京都御所を横ぎっていったのですが、ずいぶん雪が降りつもっていましたね。そのまま雪に埋もれてしまいたいくらい思いでした」（『沖縄現代史への証言、下』二〇一頁）。

歴史の大きなうねりは、さまざまな個人の想いを呑み込んで流れる。現在の「島ぐるみ闘争」は、どのような曲折を描いていくのだろうか。大衆運動には、高揚期もあれば退潮期もある。だが、歴史は単純に繰り返すことはあるまい。人は、少しずつは利口になっていくはずだ、と信じよう。

いずれにせよ、この特集号が出るころは、まだ、公開審理は始まっていない。もしかすると、総理大臣が県知事を相手どった裁判が行われているかもしれない。その裁判を通して、沖縄の自治・自立の姿が見えてくればいいのだが……。